

祝 旧県庁舎・旧県会議事堂創建100周年

100歳になりました。

—重要文化財「旧県庁舎・県会議事堂」のよもやまばなし—



開催期間 **2016.10.1** (土) — **27** (木) 閉館日を除く

100歳になりました。—重要文化財「旧県庁舎・県会議事堂」のよもやまばなし—

今から100年前、大正5年、山口の地に新しい「県庁舎」と「県会議事堂」ができあがりました。設計を依頼されたのは、工部大学校造家学科（現在の東京大学工学部）、アメリカのコネル大学で建築を専攻した妻木頼黄（つまきよりなか）率いる、名うての建築エリート集団「大蔵省臨時建築部」。妻木部長のもと、国会議事堂の新築設計をめざしていた臨時建築部所属の建築技師大熊喜邦（構造）と武田五一（意匠）を中心に、山口県庁舎・県会議事堂の設計は進められました。

今回の展示では、10数冊の県庁文書などを手がかりに、設計から落成・開庁に至るまでの秘話を紹介してみます。

【エピソード1】渡辺知事、新県庁舎・県会議事堂の「山口新築」を明言

明治44年11月27日。この日開会された通常県会で、渡辺融知事は、県庁舎と県会議事堂の新築案を県議会に提出しました〔総工費47万円余、明治45年度から48年度までの四ヶ年継続事業【←写真1】〕。老朽化の著しかった二つの建物の新築は時間の問題でしたが、当時の山口県では、新聞紙上をはじめ、さまざまな場面で、下関や防府への県庁移転論が沸きたっていました。渡辺知事は議案説明で明言しました。

「県庁ノ所在ヲ移転セントスルハ・・・県会又ハ知事ノ権限ニ属スルモノニ非ス」「県庁ハ一県ヲ統括スル政府ニシテ統治権ニ基ク国家ノ機関タリ、山口ノ地、長防二国ノ中央ニ位シ、古来ノ歴史ヲ有シ、己ニ此地ヲ以テ県庁所在地ト定メラレ・・・首府タルノ機関ニ此地ニ具備ス」「一地方ノ利害ノ為メ県庁ヲ他ニ移転セントスルカ如キハ、事理ニ適セサルモノナリ」

山口での県庁舎と県会議事堂の新築は桂太郎の宿願であったとも言われています。

【エピソード2】大蔵省臨時建築部に設計を依頼

明治44年の通常県会では、議員の手元に配られた図面に基づいて、内務部土木課の熊谷頼三土木技師（のち土木課長）が、煉瓦造二階建の新県庁舎と新議事堂について、次のように説明しています【←写真2】。

○欧州で公共的建物に採用されることの多い「レネイサンス式」建築に「東洋的建物」を加味して設計

○建築中の千葉・福岡・長崎の県庁舎でもこの形式を採用

議会前の明治44年9月から10月にかけて、大蔵省臨時建築部にその設計が依頼されました。当時、それなりの威厳を必要とした県庁舎の設計には、中央の建築技師の知識が必要とされていたのです。

明治45年4月、新築事業の専任建築技師として、大蔵省臨時建築部から正司恵一（兵庫県出身、東京帝国大学建築学科卒）が山口県建築技師として着任、内務部土木課附属の県庁舎新築事務所には、その後も、数名の建築技師が採用・配属されました。東京の大蔵省臨時建築部では、構造設計を大熊善邦、意匠設計を武田五一が分担し、その指揮下で複数のエリート建築技師が山口県嘱託技師として具体的な設計作業にあたっていました。

【エピソード3】臨時建築部から大臣官房臨時建築課へ ～武田五一無念～

大正2年6月、大蔵省臨時建築部が行政改革を理由に大蔵省大臣官房臨時建築課へと降格されます。国会議事堂新築をめぐる主導権争いがその背景にはありました。大正2年5月、健康上の理由で妻木が臨時建築部長を辞したことをきっかけに妻木グループの解体が実行されたのです。妻木の指揮下、議院建築の意匠設計を担うべく欧州視察も経験していた京都高等工芸学校教授の武田五一も大蔵技師の兼務を解かれることになりました。山口県内務部長に宛てた書翰に書かれた「残念至極」の文字には武田の無念がにじみでています【←写真3】。

大正5年7月10日、新築工事竣工、7月13日から新庁舎での執務が始まりました。また、11月18日には新議事堂で通常県会が開会しています。そして11月20日、落成祝賀式典が賑々しく挙行されたのです。

大正5年10月10日、山口の県庁舎と県会議事堂の竣成と入れ替わるかのように妻木頼黄は息を引き取ります。この日は、議院建築に向かっていった妻木の後ろ盾であった桂太郎の命日でもありました。

昭和11年11月、現在の国会議事堂が完成します。設計施工の陣頭指揮にあたったのは矢橋賢吉と大熊喜邦。意匠設計は武田五一の弟子にあたる吉武東里でした。妻木人脈はついに国会議事堂にたどりついたのです。

【エピソード4】毛利家から木材を買う

県庁舎・県会議事堂の新築と時を同じくして、三田尻の地では公爵毛利家多々良邸（重要文化財「旧毛利家本邸本館」）の建設が進められていました。毛利家では建築資材として「尾州産檜丸太材」を調達、良質の材木が牟礼村岸津の毛利家の貯木場にストックされていました。一部を山口県が買い付けて新築庁舎の「見え掛り用材（＝装飾材・化粧材）」に充てることになりました【←写真4】。建築事務所所属建築技手の永田愛一と芥川佳亮が、毛利家の貯木場に赴いて、材木の実地検分にあたった際の詳細な調書が記録として残されています。

名木の産地として名高い、滑山官林（現山口市徳地）の材木も購入されています。また、大量の材木調達の必要から、専任の建築技手が、下関・小倉・八代へも材木調査（材質・価格）のために足を運んだのでした。

【エピソード5】煉瓦納入「ちょっと待った！」

大正2年4月に地形（じぎょう）工事（＝基礎工事）が着手されます。工事は美祢郡大嶺村の安藤金次郎が請け負いました。煉瓦製造は入札の結果、呉海軍工廠への煉瓦納入の実績がある、広島県豊田郡木谷村（現東広島市安芸津町）の和田商会が受注。60万個の煉瓦が購入されることになりました。

しかし、納入時の検品に際して、煉瓦の焼き上がり具合をめぐる、和田商会と山口県建築技師が激しく対立しています。和田商会からの知事宛嘆願書には辛辣な言葉が書き連ねられています。「召喚状」「謝罪書」など、煉瓦納入をめぐる両者の応酬を伝える数々の生々しい記録が残されています【←写真7】。

やがて、両者は合意。当初の煉瓦納入期限を超過したものの、大正2年10月2日、地中煉瓦基礎工事はほぼ予定通り竣工【←写真6】。最終的な設計調整を経て、京都大岩組の請負で地上部分の工事がはじまったのは大正3年5月のことでした。

【エピソード6】建築技師正司恵一辞任

明治44年11月の通常県会で参考資料として建築図面が配布されましたが、その後も設計の詳細については大蔵省臨時建築部と山口県の間で微調整が繰り返されましおた。大蔵省と山口県の調製役として東京と山口を往復したのは専任建築技師の正司恵一。設計内容の変更打診、正司技師の東京滞在日数延伸を求める書翰など、大蔵省からの通知がいくつか残されています。予算とのかねあい、大蔵技師の待遇など、関係文書からは、大蔵省と山口県との間の微妙なせめぎあいをうかがい知ることができます。「県庁舎の設計行き悩み」との新聞報道も見られます。こうしたなか、大正2年11月3日、調整済みの「図面・仕様書・予算書」は、正司技師ではなく、ともに上京して調整にあたることの多かった建築技手城戸寿喜治により山口県に持ち帰られました。

大正2年11月、正司技師は病氣療養を理由に辞職。後任には大蔵省技師の藤本勝往（香川県出身、東京帝国大学建築学科卒）が着任します。暖房装置の設計について大熊善邦が正司恵一に問い合わせた大正2年11月21日付の書翰が残されています。封筒には、「本人八幡磨国加古郡別府村正司梅吉殿方二転住二付回送アリタシ」と記された付箋が貼り付けられています【←写真5】。

藤本技師が設計にかかわった建築としては、「県立博物館旧維新記念室」「旧県立図書館増設書庫（現クリエイティブスペース・赤れんが）」が山口市内には現存しています。

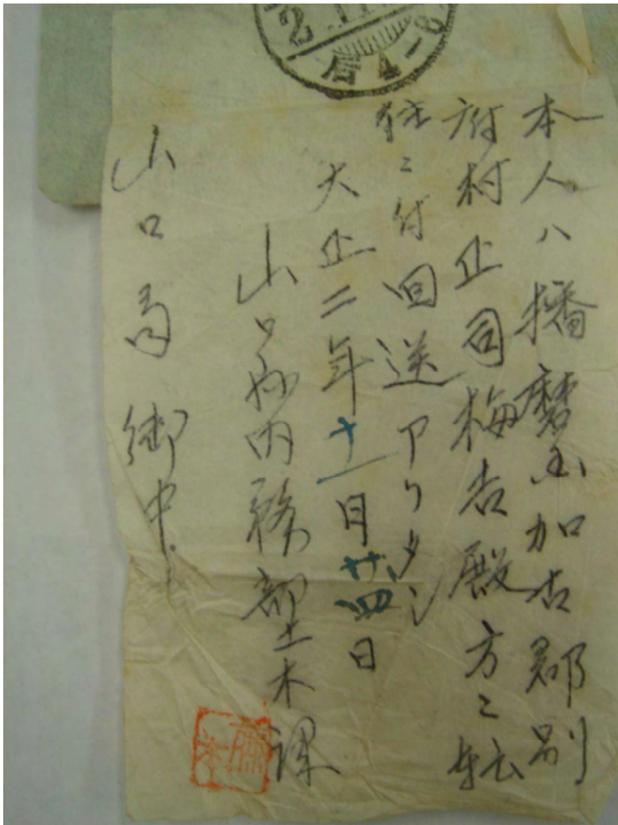
【エピソード7】「地鎮祭」そして「開庁式」

大正2年12月19日の地鎮祭の日。余興として、県庁職員による相撲大会が開かれました。大正4年9月20日に上棟式が挙行されました【←写真10】。そして迎えた大正5年（1916）11月20日の開庁式には、渡辺融元知事をはじめとして新築事業にかかわった人々を招待、翌日には一般県民にも新庁舎と県会議事堂がお披露目されています。開庁式の招待客や当時の県庁職員には、記念品として、「写真帖（撮影は山口の写真師麻生亮、製本は東京青雲堂）」【←写真9】「萩焼杯（坂高麗左衛門作）」「大内塗盆（河合辰之進作）」「記念図書（『県治概要』と『防長の精華』）」が手渡されています。

今年、平成28年（2016）、県庁舎と県会議事堂は重要文化財の勲章を胸に100歳を迎えました。

長寿の世の中、「地域の名士」として、時の流れを、あたたかく見守り続けてもらいたいものです。

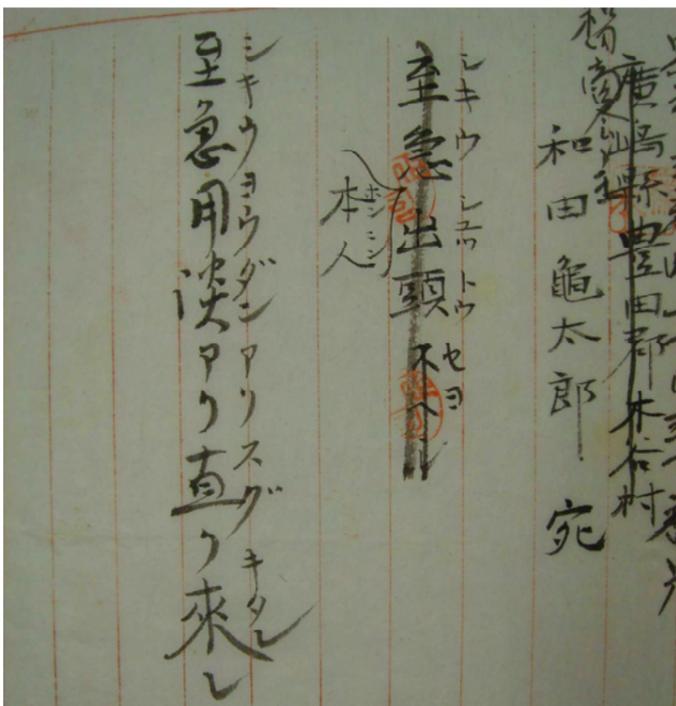
■写真5



■写真6



■写真7



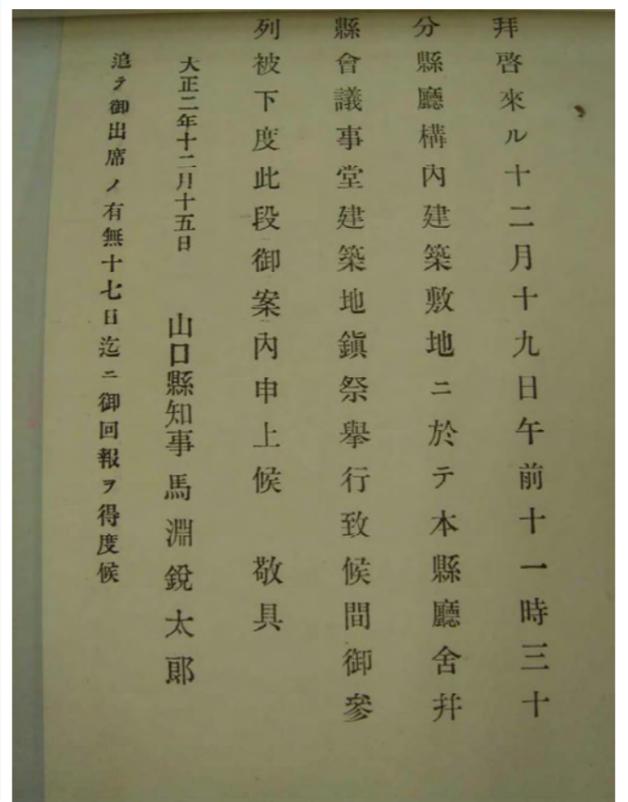
■写真8



■写真9



■写真10



パネル写真〔説明〕

写真1

「議案21号」明治44年通常県会に提出された県庁舎・県会議事堂の新築計画

〈「県庁舎建築二関スル往復一件 附復命書（其の一）〈土木課〉」

行政文書・県庁戦前 A 土木435【重要文化財】〉

写真2

新築県庁舎・県会議事堂の建築概要

〈「通常県会議案 明治44年」県会議事録577* 諸家文書・柳井市村上家19）

・・・・・・・・「レネイサンス式」建築に「東洋的建物」を加味・・・・・・・・

■土木課熊谷技師の説明。「西洋様式建築と和風建築を融合させた建物」という趣旨。

新築の県庁舎・県会議事堂は、全体的には西洋建築風デザインでまとめられているが、細部の装飾には和風の要素がちりばめられている。茶室風の天井装飾など部屋ごとの微妙なデザインの変化を観察できる。

意匠設計にあたったのは武田五一。福山出身で東京帝国大学工科大学造家学科（現在の東京大学工学部建築科）に入学。卒業論文は「茶室建築」をテーマとしたものであった。卒業後、最先端の図案（デザイン）研究のためにヨーロッパに留学。帰国後、京都高等工芸学校（現在の京都工芸繊維大学）図案科で教鞭をふるう一方で、京都において金閣や平等院鳳凰堂の修復にも携わっている。明治41年に大蔵省臨時建築部技師を兼任、建築部長妻木頼黄の配下で、ともに国会議事堂建築への道を歩み始めた。大正2年6月の大蔵省臨時建築部改組により大蔵技師の兼務を解かれ、以後は、主として京都帝国大学を舞台に建築の世界を牽引していった。

大蔵省建築技師解任後も、引き続き、山口での県庁舎・県会議事堂新築事業の指導にあたったとされる。大正4年12月には、山口県知事からの「御高説ヲ承り度」との要請により、武田は山口を訪れている。

写真3

大正2年7月2日付の武田五一書翰（山口県内務部長宛）

〈「県庁舎建築二関スル往復一件 附復命書（其の二）〈土木課〉」

行政文書・県庁戦前 A 土木436【重要文化財】〉

■大蔵省建築技師解任直後の書翰。文面には「残念至極」の文字が見える。

写真4

毛利家からの木材購入契約締結に関する決裁（大正2年10月）

〈「大正2年 県庁舎建築二関スル 木材一件」行政文書・県庁戦前 A 土木442【重要文化財】〉

写真5

正司恵一への郵便転送依頼（大正2年11月）

〈「県庁舎建築二関スル往復一件 附復命書（其の二）〈土木課〉」

行政文書・県庁戦前 A 土木436【重要文化財】〉

■正司恵一は大正2年11月18日付で山口県技師を辞職。

兵庫県の実家で静養中の正司恵一への転送を依頼したもの。封筒の中味は、新築の県庁舎・県会議事堂の設計に暖房装置を取り込むことについての了解を求めた大蔵省建築技師大熊喜邦からの書翰。

文書はのちに山口県に転送されたと思われ、翌大正3年1月、「設計承諾の旨」の回答が、正司の後任建築技師藤本勝往から大蔵省に発送されている。

写真6

県会議事堂の煉瓦基礎

■平成10年11月、県会議事堂保存修理の基礎補強工事の時に撮影。「煉瓦基礎工事」は大正2年10月に竣工。僅か10日あまりの間であったが、几帳面に積み上げられた赤煉瓦の様子を、思わず立ち止まって目にする人があとをたたなかった。実に85年ぶりに煉瓦基礎が地表の空気に触れたのである。

写真7

煉瓦請負業者への出頭要請を求める電報原案

〈「大正2年 県庁舎建築工事に用 煉瓦一件」行政文書・県庁戦前A土木443〉

煉瓦基礎工事にあたって、煉瓦の製造を請け負った和田商会（和田亀治郎）に対して、召喚を求めた電報の決裁文書（大正2年6月）。「至急出頭セヨ」。起案者建築技師正司恵一の憤りやいらだちがにじみでている。決裁の過程で熊谷土木課長の修正が入り「至急用談アリ直ク来レ」と文面が訂正されている。同時期、和田亀治郎からは馬淵鋭太郎知事に対する「嘆願書」が提出されている。

殊ニ立会検査官ノ内ニハ、自身ニ於テ不適品ト認ムル品ハ悉ク之レヲ打チ碎ク、且之レ「納入者ガコリゴリシテ再ビ不良ノ品ヲ持込マヌヨウニ破リテヤル」ナリト公言シテ、故意ヲ以テ破碎ヲナス等ノ乱暴極マル官吏サエ現ニ有之

納入された煉瓦の検品にかかわる山口県と和田商会の激しい対立の様子が生々しく伝わってくる。やがて両者の対立は氷解、煉瓦60万本が無事に納入され、大正2年10月に煉瓦基礎工事は竣工している。

写真8

県会議事堂の床下換気孔グリル

■議事堂正面玄関左手の守衛室及受付の基礎部分には、床下換気孔口をふさぐ建築当初のグリルがただ一つ残されていた。平成10年11月の写真。山口にちなんで、アルファベットの「Y」「M」、漢字の「山」「口」などを抽象化して組み合わせたのデザインとなっている。ほかにも、「山口」や「YAMAGUCHI」の文字をたくみに取り込んだ細部装飾が庁舎・議事堂の各所に潜んでいる。

写真9

「落成記念写真帖」表紙 〈大正5年11月作製、諸家文書明城文庫805：諸家文書大島佐川家1308〉

■写真8同様のデザインを楽しむことができる。左右には「Y」と「口」を図案化した鉢植えのようなデザイン。緑に着色された「Y」の文字は、鉢植えの樹木のように見える。山口の発展や明るい未来への願いを込めたものであろうか。上部で、左右のその図案をつなぐ、白い3文字。「Y」の文字を「はばたく白い鳥」になぞらえ、未来に向かっての飛翔をデザイン化したものであろうか。また下部に5連のアーチのデザインが取り込まれている。錦帯橋をモチーフにしたのであろう。「Y」と「M」の文字をデザイン化して5連のアーチを表現しているように感じられる。

なお記念写真帖は、13枚の写真と「建築仕様」「平面図」で構成されています。

写真10

「地鎮祭」案内はがき 〈大正2年12月、「建築地鎮祭一件」行政文書・県庁戦前A土木446〉

■大正12年12月19日に举行された地鎮祭の案内はがき。馬淵鋭太郎知事名で12月15日付で関係者に送付されたものです（当初は20日開催の予定）。毛利家の当主毛利元昭、県会議員などに混じって、「県庁舎新築建築所」の技術者（熊谷土木課長・工師齋藤元喜・技手江田留四郎・技手城戸寿喜治・技手小野宗信・建築技手永田愛一・工手岩崎延雄・建築技手益田実一・建築技手芥川佳亮）も含まれています。三重の折詰と酒が用意された立食の席が設けられました。余興として、県庁職員親睦会による相撲大会が開かれています。

当日夜には、大阪文楽座の竹本津太夫による義太夫節に包みこまれた山口町野田の菜香亭で祝賀会が開かれました。



庁舎玄関